
ネギま！ 風の笛を奏でる男

風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 風の笛を奏でる男

【Nコード】

N2972Q

【作者名】

風雅

【あらすじ】

風のように気ままに生きる男はどこに向かうのか……。

この物語は、その男の生き方を記した人生記である。

序幕

長い長い石階段を上り終えた先、そこにあるのは荘厳という訳でもないがとかく巨大な門があった。

清々しい風が吹き抜ける夏の初め、彼はその門の前にいた。

体格は中肉中背のどこにでも居るような青年そのもの。黒い艶やかな髪を長く伸ばし腰のあたりで括っている。

顔つきは端正なものであるが、一見しただけでは女性に見えなくもない。

背中に大きな四角い木製の箱を背負い、薄緑色の着流しを着ている。

「ここに来るのも久しいな。もう五年も前か・・・」

あいつがちゃんと力をつけたのか、見ていかないとな・・・。

青年は門を開き中へと入っていく。そして、石畳の道を真っ直ぐに歩きその先に人影を見つけた。

目の前に居るのは白い着物を着た男。彼は青年の元に向かって歩き始める。

青年はその人影の存在を認めた後、再び歩き始める。

お互いの距離が近づくと歩みを止めて、青年は口を開いた。

「久しぶりだな。元気そうで何よりだ、詠春」

「ええ。あなたの方も元気そうだなによりです」

二人は互いに再会の挨拶を済ます。

言葉にしておよそ二言。だが、その中にはありとあらゆる言葉が濃縮されていた。その姿は宛ら、長く付き添った戦友と言えるものだった。

3

「立ち話もなんですから、中に入りましょう」

「ああ」

二人は横に並び、再び歩き始める。

「しかし、あなたが来るなんて珍しい」

「風が呼んでいたんだ。まあ詳しい話は中に入ってからでいいのだろう?」

「そうですね」

ともに歩きながら取り留めもないことを話す。

やがて大きな屋敷が見えてくると、彼らはその中へと入っていった。

中に入った二人は詠春の部屋へと向かい、侍女に頼んで持ってきてもらった茶を飲みながら話をしていた。

「今回は一体どうしたのですか？何時もはあの山からは降りてこないでしょうに」

「お前が婚約を嫌がって修行と称して”向こう”へ行こうとしていると小耳に挟んだのでね」

「やれやれ……。また、風の噂というやつですか？」

「だな。風は色々な話を持ってきてくれる。例えば、お前の逃避が愛情の裏返しだということもな」

青年の言葉を聞いた詠春は、冷や汗を流す。

一体、どこからその情報を持ってくるといふのか。

たしかにその通りだ。彼女は私には釣り合わない。だからこの旅を修行として己を一から鍛え直そうと思っていた。彼女の隣に立つにふさわしい男になる為に。

誰にも告げてないはずの情報を知っている。昔からそうだ、彼には隠し事はできない。

「本当に、どうして分かってしまうのですかね……」

「風の噂だよ」

「やれやれ……。それで、小耳に挟んだあなたは何をしに来たのですか？」

「知れた事、俺も連れていけ」

「……理由を聞いても？」

「向こう」の風が呼んでいるのさ。何か面白そうなお話がある、

とな」

その言葉を聞いた詠春はがっくりと方を落とす。

この人は何時もこうだ。風のように自分の思うままに生きる。

そして、その在り方を、私は羨ましく思う。自分にはとても出来ないことだから。

「はぁ……。構いませんが、危険ですよ？」向こう”は戦争の真っ只中のようにですし」

「構わんよ。少なくとも、お前さんよりは強いんでね」

「そうでした……。そういう人でしたね、あなたは」

「分かっていただけたようで何よりだ」

「分かりたくはなかったですがね」

詠春の返答に少し満足そうな青年は、背負っていた箱から何かを取り出した。

それは木で作られた一本の笛だった。だが、ただの笛では無い。

カセプエ
風笛と呼ばれる一本の笛でしかない黒く塗られたそれは、”向こう”の人間が見たら驚き慄く物なのだから。

その笛を見たことがある詠春でさえもすこしばかり驚きを見せる。だがその驚きは初めてそれを見た人間の驚きとは異なり、青年の為人を知る彼だから見せる驚き。

「珍しいですね、あなたがその笛をこんな所で出すなんて」

何時もの彼であれば私の前でさえそれを出すことはない。

「少しばかり面白いことになりそうなんですね。まあ、余興のようなものさ」

「では、久しぶりに貴方の笛の音でも聞かせていただきましょうか」

青年は少しばかり笑みを零すと、自分の姿勢を正し、詠春に対して一礼する。

「僭越ながら青山風雅が、一曲奏かなでさせて頂く」

青年 青山風雅 は風笛を唇に当てた。

そして、部屋は穏やかな音色と雰囲気に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2972q/>

ネギま！ 風の笛を奏でる男

2011年1月26日11時43分発行